

八月から考える平和と戦争の悲劇
一宮市立中部中学校 三年 野田優奈のだから
今年も八月かやって来る。終戦から教えて
七八回目の八月。過去の戦争から今も生きる
私たちが学ぶ。平和とは何なのか。
私は昨年から今年にかけて、社会で歴史を
学んできた。そこで平和とは、脆くて
危うい。不確かだ。感じた。いんばに
注意を払っていてもほんの少しのずれで
音を立って崩れ去ってしまおうよ。な心許ない
もの。そして戦争は、平和の崩壊の先にある
悲劇なのだ。を感じた。平和とは反対に、一人
か止めよう。必死にあかいてもいふなら
ない。恐ろしく強固なもの。第二次世界大戦の
終戦からの七八年で起こった戦争や紛争の教
は五十を優に超え、その中には今現在も続く
ものが多い。戦争の悲劇を知ってもなお
続く争い。戦争のニコラスを聞く。命を
無駄にするその行動に對して、私は疑問を抱
く。なぜ戦争をするのだ。たろうか。私は

最近、同志少女と敵を撃て、という戦争を題材にした作品を読んだ。この作品で衝撃だったのは戦いの描写でもあるが、一番は、争で変わって行く人の心だ。敵におかえり疑い弱いのを力で抑え、反抗するのならば命を奪って食料を奪う。兵士たちの人格が考えかかると、残忍なものに変わって行く。この作品を読んで、戦争への恐ろしさか一段と増した。土地や作物、命を傷つけるだけでなく精神や信念さえも傷つけ、捻じ曲げようとする。それだけ恐ろしいものなのになぜ平和な世界は実現しないのだらう。一体、平和な世界とは何なのか、と私は思った。平和な世界には何か必要で何か不要なのだ。ろう。私は兵器、特に核兵器は絶対に必要のないものだと断言できる。冒頭で幾度か書いた。八月には日本人にとっても重要な日が多くある。特に八月六日。世界で初めて原子爆弾が何万という人の命を奪った日。私たちに何日本人としてその悲劇と核の廃絶を

訴え、戦争のない世界を作る義務があると思
う。そして必要なことを、それは全ての人が
、本当に平和な世界を心から望んで行動す
ることをだと考える。先ほどのような核の廃絶
を訴えることは一人でもできる。しかしそれ
を実行するにはほとと大きな力が必要だ。す
べての人が平和を望まなければ平和は訪れな
いと考える。子供である私たちにできること
は限られていく。では私たちにできることを
はないのだろうか。それは違うと思う。子供
であることを生かせばいい。子供の目線で見
た世界は大人が見るそれとは違うだろう。平
和を目指す世界に大人も子供も関係ないと思
う。世界に生きる私たち全員が平和を考えな
ければならぬ。同時に平和を担う大切なピ
ースにならなければ。私たちのさらにす
下の代の人たちが戦争で涙を流さないように
私たちが平和への一歩を作る。未来は自分た
ちの手で変えてこそ、平和は自分たちで作
てこそだと思っから。